

## 野心で紡ぐ3つのテキスト

——『帰郷』、『エセルバータの手』、『宿命と青いマント』  
とハーディのポストコロニアリズム——

栗 野 修 司

「負けたときよりも勝ったときにどれだけ多くの人が殺されるのでしょうか。」(41)

わざわざ『リア王』を例に引くまでもなく、親は自分の子供を正しく理解することも、評価することもできない（ことが多い）。作家も同様に、自分の「子供」である自著を正当に評価しないことがある。小論で取り上げるのはトマス・ハーディだが、彼は1912年に全集の決定版としてウェセックス版を出版するに当たって、その序文で自分の短編集を含む全18作を3つのグループに分けた。<sup>(1)</sup> その一番低い評価を与えられたグループに属するのが『エセルバータの手』(1876)である（それ以外の作品は、『窮余の策』と『微温の人』。いずれもハッピーエンディングで終わっていて、これをハーディは気に入らなかったのかも知れない）。詳しく論じるには紙幅が許さないが、ハーディの評価基準は、人間対運命という、当時主流であった世界観や人間観（従って、運命観）に基づいていて、そういう描き方が前面に出ていないテキストを軽んじたのである。このことはまだ彼が「性格は運命である」というヴィクトリア朝の主要命題の呪縛から解放されていないという証拠でもあるが、逆に言えば、彼が性格や運命の描き方が希薄であるという理由で、高い評価を与えなかった自作はこの呪縛に絡み取られていないということでもある。実際、『エセルバータの手』は、野心的なヒロインが自分の置かれた圧倒的に不利な立場（ジェンダーにおいても、階級的にも社会的な弱者であること）を克服し、勝利する

という現実離れした（ハーディが副題に「喜劇」と付けたのは喜劇はリアリズムの範疇に入らなかったから）プロットを特徴としている。こういう非現実的側面は、人間対運命という構図とその根本にある不可知論的運命観を真剣に考えている人たちには、不謹慎で軽率と映ずるであろう。ハーディが「喜劇」という副題をアポロギアとして付けなければならなかったのは、そういう生真面目な読者に対するメッセージでもあったと考えられる。

不真面目で軽率と受け止められる恐れがあっても、しかし、『エセルバータの手』は真面目で、真剣な文学的営為であった。それはこのテキストが野心を扱っているからである。ハーディは作家としての活動を始める以前から、野心について真剣に考えていた。正確に言うと野心の放棄を決めていた。ハーディが野心をどのように考えていたかを知るために、彼の『帰郷』（1878）と短編「宿命と青いマント」（1874）もあわせて3つのテキストを取り上げて論じたい。

## I

古典派の絵画は写実的であろうとするあまり、複数の絵の具を混ぜ合わせるので、カンバスが薄暗くなってしまう。同じようなことが、ハーディの小説にも見られる。彼がきまじめに不可知論に基づく運命観をテキストに写そうとすればするほど、テキストは暗くなっていくのである。『帰郷』しかり、『テス』しかり。彼の「明るい」テキストにはこのようなきまじめさは見られない。印象主義の画家がしたような、絵の具を（混ぜ合わせないで）重ね塗りして、明るさを保ったような印象がそこにある。非現実的になりそうな可能性を無視してまで、大胆にテーマを絞って（画家に例えるならば、絵の具の数を絞って）、主張を見えやすくしている。野心はハーディのテキストを紡ぐ、鮮やかな色の糸（意図）で、注意深い読者ならその色に気づくであろう。

ピーター・ウィッドウソンは、『エセルバータの手』を評価した数少ない研究者のひとりである。ハーディ自身がウェセックス版ハーディ全集に付けた序文（1912年）を彼は批判の組上に載せる。『エセルバータの手』を最下位のグ

ループに置いた理由には妥当性がないというのが彼の主張である。ハーディが1912年に至るまでの半世紀の間にものした作品に無理矢理「均質性」を与えようとするあまり、彼の作品群の優れた特徴である多様性を無視したと述べ、特にハーディは自分のテキストのもつ反リアリズム小説としての潜在性を一顧だにしていなと批判している。反リアリズム小説として『エセルバータの手』を評価しながら、しかし、ウィッドウソンはハーディの野心の放棄は「俗物根性の裏返し (inverted snobbery)」だと手厳しい (17)。功成り名遂げた、メリット勲章の受賞者であり、ノーベル賞の候補にも上がる程の作家が、<sup>(2)</sup> 青年期を振り返って、自分は「社会的な野心を欠いていた」と書いたことを素直に読むのは確かに難しいかも知れない。だが、これからまさに世に出ようとしていた頃のハーディが背負っていたハンディの大きさを考慮すれば、彼が野心を持ち得なかったことは十分理解できる。だから、ハーディの社会的、経済的栄達は奇跡と言ってよかったし、彼自身それを若い頃には想像すらできなかったのではないか。

貧しい労働者階級に生まれたハーディには生きるための選択肢は多くなかった。彼が圧倒的なハンディを持って生まれたことは、彼の自伝的小説である『ジュード』に明らかだからここでは触れないが、フォスター法制定以前のとても十分とは言えない程度の初等教育を私塾で受けただけで社会に出たハーディは、<sup>(3)</sup> 家業の石工を生業にして社会の底辺で生きることを運命づけられていた。サムエル・スマイルズの『自助論』には、ハーディの若き日を思わせる、貧しい家に生まれて、刻苦勉励した人物が「自己修養 (Self-culture)」の例として紹介されている。ジャーナリストで下院議員であったウィリアム・コベット (1763-1835) がその人である。コベットとハーディには顕著な類似点がある。コベットは赤貧洗うがごとくの生活をしながら、英語の読み書きも独学で身につけた。スマイルズの引用している、コベットの自叙伝によれば、1日6ペンスで私兵として雇われている間、「兵舎のベッドの端が勉強机で、ナップサックが本棚で、膝の上に置いた板が物書きの机だった」とか、「一本のペンや一枚の紙を買うために、食事を切り詰めなければならなかった、それだけでなくでも空腹でたまらなかったのに」 (286-7) というように、彼の少年期と青

年期には、貧しさとスマイルズの賞賛する「堅忍不拔 (perseverance)」が常に同居していた。<sup>(4)</sup> その堅忍不拔によって成功した人物のひとりとしてスマイルズはコベットの例に挙げているのだが、彼のような人物がモデルとなりえるのは、こういう成功者が例外的に少なかったからである。才能に恵まれ、忍耐力も持ちながら、貧しいがために社会の底辺に沈んだままであった人たちこそ圧倒的に多数派であっただろう。いや、短い平均余命が成功の最大の障害であった。<sup>(5)</sup> 注意深い読者なら、スマイルズの『自助論』の行間に、失敗者（堅忍不拔をもってしても現実を変えることができなかった人たち）の嘆きの声を聞くことができる。<sup>(6)</sup>

『自助論』のイデオロギーは労働者階級の琴線に触れた。『自助論』が「労働の福音書」とも呼ばれたという事実 (Briggs 117) が、その性格とそれの読者の種類を雄弁に物語っている。1834年に制定された新救貧法が労働の重要性を人々に再確認させたという事実も忘れてはいけない。労働の対価は経済的な安定と、出世であったから、野心は、19世紀イギリスの労働者階級にとってはテーゼであった。だから、「お母さん、うまくやるってどういうことなの (Mother, what is doing well?)」(『帰郷』 178) と問う息子と、中産階級のイデオロギーに染まった母親との距離は大きく隔たっていた。ここで言う中産階級のイデオロギーというのは上昇志向で、それをヨーブライト夫人は意識しないで口に出している—

「わたしはいつもずっと思っていたの、あなたがまっすぐに進んで行ってくれるって。男という名前にふさわしい、他の男の人たちがそうするようにね。」(『帰郷』 177)

直進しなさいという希望を述べたときに、母親は社会的上昇を意味しただけだが、それには地理的な移動も伴う必要があることを認識していなかったようだ。故郷を捨てることはクリムにはできぬ相談だった。スマイルズが『自助論』で立志伝中の人物としてあげている劇作家のベン・ジョンソンが若い頃、「手にはタオル、ポケットには本」(22) を持って建築現場で働いていたことを引き

合いに出して、ポール・ターナーは「大工や煉瓦積み職人がそのことを知ったら、きっとジョンソンを誇りに思うだろう」(Turner 1)と書いている。だがジョンソンが働いていたのはロンドンの法曹院<sup>リンカンズ・イン</sup>の建設現場であったから、出世するためにロンドンを離れる必要はなかった。しかし、クリムは(ハーディも)自分の故郷を離れてまで、出世をするつもりはなかったようだ。母親ともスマイルズとも異なって、彼は野心には関心を持たなかった。なぜだろうか。

ハーディは「70年代に(In the Seventies)」という意味ありげなタイトルの詩を残している。この詩だけを独立して読むだけでは、意味をなさないが、同じ時代に書かれた小説に描かれている野心の文脈にこの詩を置くと彼のメッセージが浮かび上がってくる。1870年代のハーディはロンドンで建築家の助手をしながら、詩を書き、小説にも手を染めながら、自分の生きる道を探っていた。「いかに生きるべきか」を常に考えながら、しかし、その答えを口に出すことはなかった。「胸中に、堅く閉じ込めていた」――

不思議な光を投げかける、  
星のように輝く考えを、  
働いているときも、静かに身体を休めているときも。(2-4)

この詩そのものが観念的すぎて、詩としてのよさを感じさせない。「星のような考え(starry thoughts)」というのは詩的な表現かも知れないが、意味は明確ではない。遠くにあって、手が届かないという意味だろうか。明らかな形をとっていないという意味も含意されているかもしれない。そういう考えを胸に秘めたまま、口にすることはなかった、というのは、30代の若者としては、確かに珍しいかもしれない。(スマイルズの賞賛するベン・ジョンソンなら、「劇を書いていますよ」と言いふらしたのだろうか。)

彼は自分の考えを持っていたかもしれないが、それを誰にも打ち明けず、従って誤解されていたようだ――

僕に会っても、頭をふりふり、

そばを通り過ぎるだけ、「やれやれ  
今後のためにも、名誉のためにも、やり方を変えなければね。」  
70年代には、隣近所の人たちも親友さえも、  
そばを通り過ぎるだけ、僕に会っても。(7-12)

「親友 (my friend)」が誰を指しているのかここでは不明だが、一番彼を理解している人という意味であろう。そういう立場にいる人にも、70年代 (30代) のハーディは自分の考えを打ち明けなかったようだ。第2連に置かれたこれらの詩行から、彼の周りの人たちは栄達を重視しているのに、それを軽視しているように見えるハーディのことが理解できなかったらしいことと、そういう人々を彼の方でも無視をしていたらしいことが分かる。ウィッドゥソンがハーディを批判して、「俗物根性の裏返し」だと言ったのは、まさにこういうハーディの態度を指しているのかもしれない。立身出世に興味を持たなかったというこの詩の趣旨は『ハーディ伝』の記事に見事に対応しているから。

『ハーディ伝』は彼が書いた詩のサブテキストとして読むことできる。実際、「70年代に」を理解する助けとなりそうな記事が、いくつかそこに含まれている。20代の終わりにドーセットを出て、ロンドンでブロムフィールドの建築事務所に職を得たが、ハーディは建築家の仕事をあまり好んではいなかったようである。その憂鬱が『ハーディ伝』1867年の記事に記されている—「彼は社会的な上昇 [立身出世] には尻込みする体質であったから、階段を上ることを科学する (a science of climbing) 人生よりも、感情としての人生を好んだ」(53)。“a science of climbing”という表現は上昇志向を端的に表している。縁故に頼ったり、運に任せたりするのではなく、計画を立て努力をして、社会の階段を上ることがここには含意されていて、それ自体何ら批判すべき点はない。その意味では、スマイルズの立身出世とはほとんど違いがない。しかし、それをハーディは好まなかったようだ。やや下って1871-72年には次のように書いている—「ハーディは、科学的なゲーム (a scientific game) としてではなく、感情のみとして人生を好むという彼の生来の性向を抑えることに決めた」(87)。この記事は70年代に書かれたとされているから、先に引用した

「70年代に」という詩と趣旨と時間が対応している。ハーディは感情 (emotion) と科学 (science) を対立し、相容れないものと見なしていたらしい。感情は詩歌、さらには文芸であり、科学は社会での栄達を指していると考えられる。同じような二項対立をスマイルズも使っているが、その結論はもちろん違う。

『自助論』はこの時代のベストセラーのひとつで、1859年の11月に出版されるや、その月のうちに3刷、1901年までに50刷を数えたそうだ。特に中産階級と労働者階級に好んで読まれたという (Morris 35)。『自助論』を織り上げる思想は、スマイルズ独特の二項対立である—「読書よりも労働によって、文学よりも生活によって、学問よりも行動によって、経歴よりも性格によって、人は完全になるもので、これらは常に人類を革新するのである」(21)。ここでスマイルズは成り上がりのイデオロギーを宣言して恥じるところがない。楽天主義にも圧倒される。プロパガンデストというのは少ない事実を針小棒大に見せるひとのことを言い、少数の成功者を取り上げて、そのやり方を参考にすれば誰でも成功できるという幻想をかき立てるという点に特徴があるが、そのために複雑な世界を単純化しすぎていることは否定できないであろう。それでもスマイルズはよく読まれた。彼が生きて、書いた時代が、神という言葉に次いで、仕事という言葉の人々が最も頻繁に口にした時代 (Houghton 243) だったことも幸いした。しかし、ハーディはスマイルズを認めなかったようだ。ハーディとスマイルズの二項対立では、重視するものが逆になっている。当時のベストセラー作家の思想は彼の考えとは相容れなかったのである。

『エセルバータの手』はこの二項対立を主軸に、その周りに恋愛模様を配してある。ヒロインのエセルバータは、女でありながら「恐ろしくなるほどの野心家」(80) と見なされ、「わたしはあまり例がないほど工夫の才があるの」(216) と口にするような自信家でもある。彼女は、「生まれながらの音楽家であり芸術家であり詩人」(31) であるクリストファー・ジュリアンを愛している。彼は音楽を教えて生計を立てる、出世や野心とは縁のない人物として描かれている。エセルバータに向かって、「せめて君の半分だけでも冒険心があつたら、僕も何かうまくやれたのに」と嘆息してやまぬこの男に、ハーディはし

かし、大聖堂のオルガン弾きという職業を最後に与えている。ハーディ自身が『ハーディ伝』で、「この世の他の何よりも、大聖堂のオルガン奏者になりたい」書いている、その大聖堂のオルガン弾きである。<sup>(7)</sup>『エセルバータの手』は、これまで女性の野心について書かれた小説のように理解されているが、どうしてどうして、これは野心（立身出世）より芸術を選択した男の物語でもある。こういう見方をすると、周縁にいたクリストファーが中心へ浮かび上がってくる。それだけではない。これは立派なポストコロニアル小説でもある。

『エセルバータの手』の舞台背景はイングランド（ドーセット [ハーディの「ウェセックス」] とロンドン）とフランス（ルーアンとパリ）であるが、ここでも注意深い読者の想像力は、地理的な限界を知らない。ヨーロッパを越えて、アジアやオーストラリアの植民地へと飛翔する。ここで思い出すのは、『帰郷』の主人公クリム・ヨーブライトがパリでダイヤモンド商のもとで働いていたという設定である。ダイヤモンドの原石の主要供給元は南アフリカとインドで、ともにイギリスの重要な植民地であった。<sup>(8)</sup> クリムがこの仕事を辞めた理由は「派手で」、「女々しい」からとしか語っていないが（177）、ポストコロニアルリズムの文脈にこのテキストを置いて読めば、彼の野心の放擲は植民地との絶縁でもあった。語り手も主人公もこのテキストでは、自分のポストコロニアルな意見を明確に表明していないが、ハーディもハーディのウェセックスも常に植民地とつながっていた。

『エセルバータの手』はクリストファーの言葉を介して、イングランドと植民地（インド）とを関連づける。彼は音楽家という職業についてこう語る―「生計を立てる手段としてはいくつも欠点があるが、偉大になるための、あの耐えがたい準備（those excruciating preliminaries to greatness）に苦しめられなくてすむ」（90）。ここで言う準備（preliminaries）は「予備試験」などを意味するが、those という指示代名詞から明らかなように、語り手のクリストファーと聞き手の妹フェイス（と読者）との間で共通認識となっていた事柄を指すと考え、この予備試験はインド高等文官の予備試験を指すと考えるのが妥当であろう。インド高等文官（Indian Civil Service）が登場する短編「宿命と青いマント」が、『エセルバータの手』の2年前に出版されている。



この短編では野心の問題も論じられている。主人公オズワルド・ウィンウッドがICS採用試験を賞賛する言葉―「競争原理に基づく試験はなんてすばらしいのだ、それは、しかるべき人間をしかるべき地位に就けるだろうし、劣った人間はもっと落ちていくだろう」(7)―は、スマイルズの立身出世のイデオロギーのコピーである。こういう言葉を、田舎出ながら野心家の主人公の口にもわせることによって、作者の立ち位置―ポストコロニアルで反立身出世―を明確にしていることに注意したい。

エセルバータとクリストファーが愛し合いながらも結局結婚できないように、オズワルドとアガサも愛し合い、婚約までしながら、結局結婚できない。エセルバータの野心がクリストファーとの結婚の障害となったように、オズワルドの野心がアガサとの結婚の蹉跌となった。上の段落の引用では省略した部分にオズワルドの野心が表明されている―

「君は僕がインドへ行くのが嬉しくないの。ここでひどい仕事をするよりも、インドでうまくやる方がいいだろ。嬉しいわ、と言ってくれよ、アガサ。インドへ行ったら僕はもっと鍛えられて、強くなるだろう。」

「嬉しいわ、」とアガサは小さく言った。「頭では嬉しいのよ。でも心では嬉しいとは思えないの。」

「マコーレーのおかげで、優秀な奴らと同じ機会を得られるのだ」と彼は意気込んで言った。(7)

オズワルドの言葉には彼の劣等感とそれを乗り越えようという野心が表れている。イングランドにいても自分が浮かび上がるチャンスはないという思い込みと、高等文官になれば、社会的階層で彼よりも上の若者たちと競い合うことができるという期待とが彼の決意を後押ししている。ここでオズワルドが言及しているマコーレーは、トマス・バビントン・マコーレーのことで、彼がインドへ赴任した翌年の1835年2月5日に「インド人の教育についての覚え書き」を公にして、英語をインドの公用語とすること、教育も英語でおこなうことなどをイギリス政府に要求した。その提言に基づいて、1855年から、社会階級

を問わないで、共通試験によって優秀な人材を選抜する試験がおこなわれるようになった。それがインド高等文官試験であった。実力主義であったので、オズワルドのような高い目的意識を持つ、労働者階級の若者には歓迎された。しかし、イギリスで抑圧され、搾取される立場であった労働者階級出身者が、インドでは植民地の人々を抑圧し搾取する立場になるという皮肉について、オズワルドは認識していたかどうか、テキストは明らかにしない。

オズワルドにはモデルがいた。ハーディは、この短編の創作に靈感を与えた人物として、ウィリアム・バーンズの私塾で、同級生でありライバルでもあった少年の名前を挙げている。その人物、ウィリアム・フーパー・トルボートはオズワルド同様、高等文官試験に合格し、『タイムズ』紙にその名前を掲載されたほどの秀才であった (Hardy, *Life and Work* 37, 168)。幼なじみであり、追悼文を書くほどの関係であり、<sup>(9)</sup> 彼の学友中の出世頭であるのに、それをモデルに、ハーディが運命の皮肉を扱う短編小説を書いたことはいささか不思議の感がある。しかし、彼が野心や立身出世に批判的であったことを考えると納得がゆく。

「宿命と青いマント」は自己実現の手段として結婚だけしか持たない、経済と機会において貧しいふたりの娘の物語でもあるが、同じようなハンディを負った労働者階級の娘として、エセルバータを加えることができる。エセルバータが「男だったらよかったのに」と、女であることを口惜しいと思うのは、彼女がサミュエル・スマイルズの信者だったからだ。『エセルバータの手』に喜劇という副題がつけられているのは、社会的な野心や立身出世に批判的であったハーディの、エセルバータの上昇志向の生き方に対しての批判が込められてもいるのであろう。

## II

ハーディが植民地について直接語ることはあまりない。しかし、彼が植民地についてどのように考えていたかを示すようなエピソードがいくつか存在する。『エセルバータの手』でも、いささか回りくどいが、注意深い読者だけが気づ

くような形で、ハーディのポストコロニアリズムが忍ばせてある。『エセルバータの手』という奇妙なタイトルは、手に結婚という意味があるので分かるように、エセルバータの結婚というこの小説のテーマを暗示している。そのエセルバータが多く求婚者に囲まれて、「現在の男性不足 (the present man-famine)」(265)という言葉の口にしてしている。別の場面では、彼女の弟が、自分の母親と同じ年齢の召使いと結婚すると公言して、「夫 (になろうというひと) は数が少ないから」(212)と言う。ふたりの言葉はイギリスの植民地主義と関係がある。

植民地支配が拡大するにつれて、イギリス国内では植民地へ労働者として移民する男が増えて、女性は結婚相手を見つけることが難しくなった。これが女性過剰問題 (surplus woman problem) と呼ばれて社会問題になった。エセルバータとその弟のダンの言葉は単なる男女の関係をを超えて、植民地の問題に関わっている。『エセルバータの手』の結末では、エセルバータのふたりの姉は結婚してクイーンズランドへ渡ったと語られる。ふたりの移民が自主的なものか、女性過剰問題解消のために政府の推進していた移民<sup>(10)</sup>であるのかは明らかではないが、ふたりの結婚相手は農夫で (404)、植民地の人たちを搾取するような仕事に設定されていない点にまず注目したい。ここにハーディのポストコロニアル的な視点を垣間見ることができるからである。

ふたりの結婚は2年前のこととして語られているから、グエンドリンもコーネリアもオーストラリアで、その後ずっとつましいが幸福な生活をしているという含みがあるのであろう。わざわざ農夫であることに注意を喚起したのは、植民地で得たお金がしばしば easy money (「悪銭、あぶく銭」) として「デウス エクス マキナ」のように使われる例がヴィクトリア朝の小説に見られるからである。その好例が、ディケンズの『大いなる遺産』のピップを紳士にした、囚人マグウィッチがオーストラリアで稼いだお金、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』でジェインのシンデレラ・ストーリーを可能とした、マデイラで事業をしていた叔父の遺産である。ハーディの作品にも植民地で財をなした叔父の遺産を (例えば、『帰郷』ではワイルディープがカナダで財をなした叔父の遺産を) 相続するというエピソードが含まれている。しかし、ワアイ

ルディーブは、この遺産を使って、ユーステイシアとパリへ駆け落ちしようとするが果たせず、ふたりとも溺死する。<sup>(11)</sup> 植民地で得た財産が無駄になるという設定にはハーディのポストコロニアル的な視線を見ることができる。それは財産（遺産）そのものが無に帰するというだけではなく、その先にある植民地起源の大金のうさんくささ（「悪銭」）の表明であり、さらにはそれを手に入れる手段を可能にした大英帝国による植民地経営を批判する意図もあったのではないか。

同様の意思表示は、「主を待つ晩餐（The Waiting Supper）」でもおこなわれている。これも無駄になった植民地起源の悪銭を扱う小品である。この短編もハーディ小説の定番のひとつである社会的身分の差のある男女が愛しい、結婚しようとして周りの反対にあうが、何とか「身分の壁」を乗り越えようとする物語である。ふたりは駆け落ちを試みるが果たせず、男がそれでは大金持ちになって、身分の差を克服しようとする。15年ほどして故郷へ戻って、女が他の男と結婚したことを知らぬまま、元恋人に男（ニコラス）は打ち明ける―「転石苔を生ぜずというけれど、時にはこけが生えることもあるのですよ。あの金鉱に真っ先に駆けつけましてね。お陰で、そこで望んだ通りの大金持ちになれましたよ」（311）。この短編の興味深い点は、物語の時代背景がほぼ特定できるように語られていることだ。1837年に物語は始まって、男がイングランドへ戻るのがその15年後の1852年頃であると語られる。だから、ニコラスは、50年代に入ってから始まったオーストラリアのゴールド・ラッシュ<sup>(12)</sup>の「一番手（one of the pioneers）」となって、かなりの財産を積み上げたということが容易に想像できる。実際、ニコラスは the gold-fields と定冠詞をつけて金鉱のことを語っているのである。当時のひとには、金鉱と言えばオーストラリアの金鉱山ということは自明だったのであろう。女（クリスティン）の夫は長い間行方不明で、ふたりは結婚しようとして、クリスティンがニコラスのために晩餐を準備して待つが、そこへどこからか夫が戻ってきて、慌ただしく晩餐を食べてまた出て行って、戻ってこない。またいつ戻ってくるかも知れないと不安を抱きながらふたりは日を送る。男が晩餐を食べて出ていってすぐ、近くの水路に誤って落ちて溺死したということを知って後も、ニコラスと

クリスティンは結局結婚に踏み切ることができず、オーストラリアで稼いだ大金も使われないままであった。この短編小説も植民地主義に異議申し立てをしている。

このようなハーディのポストコロニアル的な姿勢を考えると、なぜ彼が同時代のベストセラー作家であったスマイルズに言及しなかったかが明らかになってくる。スマイルズの『自助論』には警句と英雄の伝記が充ち満ちている。だがその選択は偏っていて、女性と非白人の男への言及は少ない。女性は、スマイルズがあげている人生のモデルとなるべき750名中わずか7名にすぎないし、非白人に至っては、3名である。同様に、アフリカや中東やインドは、彼にとっては「単に、兵士や植民地経営者や大英帝国の役人たちが栄光を手に入れるために躍起となっている地域として表象されているにすぎない」(Sinnema 20)。事実、スマイルズはアフリカやアジアでのヨーロッパ人の軍事活動を讃えるだけでなく、キリスト教の拡散についても賞賛している―「剣を持った英雄たちのことを心にとめることはもちろんだが、福音を伝えた英雄たちのことも忘れてはならない」(202)。その一人、ジョン・ウィリアムズは西太平洋のバヌアツで「野蛮人たち (savages) に殺戮された」(204)と書いている。これらの特徴はハーディのテキストには発見できない種類の特徴である。

冒頭に掲げた、「負けたときよりも勝ったときにどれだけ多くの人が殺されるのでしょう」というのはフェイスの言葉である。ジュリアンの妹はこの言葉によって、植民地主義の勝利と不毛を焦点化して、そこに存在するパラドックスを指摘している。植民地を拡大するためには勝たねばならず、勝つためにはより多く失うことになる。植民地主義はより多くを得ようとすれば、それだけ多くを失うというパラドックスから逃れられない。同じような視点で、ハーディはいくつもの「戦争詩 (War Poems)」を書いて、戦えば戦うほど不幸や悲嘆が増えるという逆説を描いた。彼の戦争詩は『新旧詩集 (Poems of the Past and the Present)』(1922)の巻頭に置かれて、ボーア戦争を批判する11編の詩からなる。例えばその一つ「サウザンプトン港のドックで、1899年10月に」という副題の付いた「出帆 (Departure)」と題する詩―

これから先、どれだけ長く、チュートンよ、スラブよ、それにゴールよ、  
おまえたちは怒りの論理でこれらの人々の命を思うまま、  
ゲームをする手で操り人形よろしく、もてあそぶのか。(8-10)

引用の「これらの人々」は兵士たちを指す。チュートン（イギリス、ドイツ、オーストリア）、スラブ（ロシア）、ゴール（フランス）はそれぞれヨーロッパの列強にして、植民地大国で、それが国民を兵士として、アフリカへ送り出す。ハーディの「戦争詩」の詩行には、戦果を期待する精神的 high とは無縁の不安と悲嘆と怒りが溢れている。戦う人ではなく、戦わされる人としての兵士、負ければ犬死で、勝っても英雄にはなれない兵士たち。だが一行目の「チュートン」、「スラブ」、「ゴール」に含まれるのが単に支配層に属する人たちだけなのかということは曖昧である。ハーディはおそらくわざと曖昧にしたのであろう。戦争の遂行は好戦的な支配者だけではおこなえないからだ。この詩の前後に置かれた詩も同じ副題を持っていて、連続する場面で、遠くアフリカの戦場へ送られようとする兵士たちとその家族の不安と悲嘆を描いている。

この詩の前に「乗船 (Embarcation)」という題の詩が置かれている。前段の詩の前に起きた出来事を描いている「乗船」では意図せずに戦争に加わる人たちの悲しみが描写されて、読む人の心を打つ――

隊列が甲板へと歩みを進めるとき、

[...]

その大義を疑うものもなく、不平をもらすものもない、

妻、姉、妹たちが、笑顔を浮かべて白い手を振る、流れる涙に気づかぬか  
のように。(8, 12-14)

この詩に登場する人たちは加害者だろうか被害者だろうか。あるいはまた、植民地主義の恩恵を受ける人たちだろうか、それともそういう恩恵とは無縁の人たちだろうか。ハーディの戦争詩が描く人々はスマイルズの二項対立の埒外にある。二項対立は植民地主義を正当化するが、パラドックスはそれを無効化する

る。

\* \* \* \* \*

『エセルバータの手』にはインドへのはっきりした言及が一度だけある。エセルバータがマウントクリア卿と結婚する直前に、「式は簡素で貴族の結婚式のようなのではないのよ」と妹に向かって、内輪だけで式を挙げると説明しながら、続けて言う―「それに内緒なのよ。わたしって、まるでインドの資産家（an Indian fortune）の相続人みたいでしょ」（316）。fortuneは辞書に忠実に訳すと「女の資産家」の意味になるが、男であれ女であれ、それはこの文脈では重要ではない。だが、ポストコロニアル小説としての『エセルバータの手』の文脈で読もうとすれば、「インドの」という形容詞の前で立ち止まる必要がある。そこで立ち止まって考えなければならない。「インドで財をなしたイギリス人の資産家」と解しても、「インド人の資産家」と解釈しても、その資産を相続する権利を持つことをなぜ秘密にしなければならないのかという疑問が生まれるからだ。その資産がやましいものだからと考えれば、エセルバータが、「内緒にしなければ」と口にする理由がはっきりする。エセルバータは、インド関連のお金は、公然と口にできないような、不当な方法で得られたものだと暗に語っているのである。シャーロット・ブロンテやディケンズが植民地由来の大金を主人公の幸福や自己実現の手段として使うことを全く問題視しなかったという事実をここで思い出すと、ハーディのポストコロニアルな視点がさらに重要性を増すことになる。ハーディのポストコロニアル・テキストを織りあげている糸を解きほぐすと「植民地色」の糸が見つかる。その先がインドや南アフリカの植民地へつながっていることが分かるであろう。

『エセルバータの手』が出版されたのはヴィクトリア女王がインド皇帝となった年であった。イギリスが植民地帝国の絶頂に上り詰めた時にハーディのポストコロニアル・テキストは出版されたということになる。これは全くの偶然だが、世間の高揚（国家のレベルでは植民地拡大の野心、個人のレベルでは立身出世という野心）に背を向けたひとがその数は少なくとも存在したという証拠である。

本論文は、平成24年度科学研究補助金（課題番号22520276）による研究成果である。

## 注

- (1) 最上位に置かれた小説群には「性格と環境の小説」という名が与えられていて、*Tess of the d'Urbervilles*, *Far from the Madding Crowd*, *Jude the Obscure*, *The Return of the Native*, *The Mayor of Casterbridge*, *The Woodlanders*, *Under the Greenwood Tree*, *Life's Little Ironies* and *A Few Crusted Characters*, *Wessex Tales* が含まれる。「ロマンスとファンタジー」という名の次のグループは、*A Pair of Blue Eyes*, *The Trumpet-Major*, *Two on a Tower*, *The Well-Beloved*, *A Group of Noble Dames* で構成される。「創意と工夫にとんだ小説」という名前が示すように、入り組んだプロットと人物構成が特徴の *Desperate Remedies*, *The Hand of Ethelberta*, *A Laodicean* が最下位に置かれている。
- (2) ハーディは 1910 年から 27 年まで、15 年から 21 年の期間を除いて、毎年ノーベル文学賞の候補に含まれていたが、作品が暗いという理由で、結局受賞できなかった。
- (3) 現在では信じられぬことだが、19 世紀初頭のイギリスでは、一般大衆（特に労働者）に教育を与えることに反対する意見が少なくなかった。労働者の子弟が読み書きや算数を学ぶと労働を嫌悪するようになるとか、「社会階級が彼らに規定しているよい召使いになることや骨の折れる仕事をするなど、与えられた運命を軽蔑するようになりかねない」というのがその理由であった。そういう事情もあって、完全とは言えないが義務教育が普及し始めたのは 1870 年に制定されたフォスター法で、10 歳までの子供の教育費の準備が定められ、1880 年に初等教育法で、5 歳から 10 歳までの子供の教育が義務化されるまで、教育を受ける機会は労働者の子供には少なかった（“Education of England”）。『帰郷』にはそのような「反教育」が染みついた労働者たちの姿が描かれている。クリムが学校を開きたいという計画を聞いて、村人のひとりは、クリムの善意を認めつつも、「実行するのはとても無理だね」（172）という反応を示す。『帰郷』の時代背景は、「空腹の 40 年代」と呼ばれる 1840 年代に設定されている。
- (4) 『ジュード』には彼の「個人教授」が詳しく語られている。世話になっていた大叔母の焼くパンを配達する馬車を駆りながら古典ギリシャ語の文法書を読むジュードの姿（28）はスマイルズの描く立身出世のモデルに共通する若き日の刻苦勉励を思い出させる。
- (5) 工業都市と田園地帯との違い、職種の違いによって差はあるが、平均余命は 40 年ほどであった。



- (6) 世に名をなすというレベルでなくても、同じ工場労働者でも、熟練工は雇用者から特別の便宜を与えられて、給料も高く、「労働貴族」となって、「不安定で、搾取され、指導者不在の境遇に置かれている通常の労働者」とは異なった生活をしたそうである (Thompson 198)。「通常の労働者」が圧倒的に多数であったことは言うまでもない。
- (7) しかもクリストファーは最後にメルチャスター大聖堂のオルガン奏者になるという設定になっている。ハーディの「メルチェスター」は現実のソールズベリーで、ソールズベリー大聖堂を大聖堂好きのハーディは最大限に評価して、こう書いている―「彼がそこにいることを決して飽きることのなかった場所である。というのは、その大聖堂はイングランドで建築家の意図が最大限に活かされている最も見事な例であるから」(『ハーディ伝』295)。
- (8) インド中部のゴルコンダはゴルコンダ王国の首都 (1512-1687) で、その富とダイヤモンド磨きで有名であった。ゴアはヨーロッパへのダイヤモンドの輸出港として栄えた。現在でも「ゴルコンダ」は普通名詞として、「豊かな鉱山、宝の山」(『新英和大辞典』)の意味で使われる。1866年に南アフリカでダイヤモンドが発見されると、今度はアフリカ南端への「ダイヤモンド・ラッシュ」が始まり、1869年に「アフリカの星」と名付けられた80カラットを超える重さの原石が発見されて、さらに鉱山の発見と開発が続いた。南アフリカは世界最大のダイヤモンドの産地となった。それが帝国主義国のアフリカ進出を促した。イギリスは1880年から2度のボーア戦争を戦い、南アフリカの支配(とダイヤモンドと金の鉱山の支配)を確実にした。
- (9) 1883年8月14日にハーディが書いたトルボートの追悼文が翌日の『ドーセット・カウンティ・クロニクル』に掲載された (Hardy, *Public Voice* 57-60)。
- (10) 労働者階級の人口増をどのようにして食い止めるかはこの時代の支配階級にとって懸案となっていた。その解決策として国家的な規模で推進されたのが移民と産児制限であった (Tosh 151-3, Kanner 183)。
- (11) 英語テキストの uncle をすべて叔父と訳しているのは当てずっぽうではない。ヴィクトリア朝のイギリスでは長子相続が原則だったから、次男以下はたとえ金持ちに生まれたとしても、経済的な援助を(ましてや豪勢な生活を)親から期待できなかったから、外へ出る必要があった。ジョン・リードはこのような慣習を『ヴィクトリア朝のコンヴェンション』に含めている。
- (12) オーストラリアのゴールド・ラッシュについては、オーストラリア政府のサイトに詳しい。それによれば、ニューサウスウェールズ州のバサーストで1851年に金鉱が発見されて、4ヶ月後には千人以上の「金鉱掘り (diggers)」がこの町に群れたという。1852年にはバサーストの金産出量は26トンを超えたという。

## Works Cited

“The Australian Gold Rush.”

<http://australia.gov.au/about-australia/australian-story/austn-gold-rush>.  
Feb. 6, 2014. Web.

Briggs, Asa. *Victorian People: A Reassessment of Persons and Themes 1851–1867*. 1855. Chicago: U of Chicago P, 1972. Print.

Brantlinger, Patrick. *Victorian Literature and Postcolonial Studies*. Edinburgh: Edinburgh UP, 2009. Print.

“The Dazzle of Victorian Diamonds.”

<http://www.diamonds.net/Magazine/Article.aspx?ArticleID=34827&RDRIssueID=76>. Feb. 4, 2014. Web.

“Education of England: The History of our Schools.”

<http://www.educationengland.org.uk/history/chapter02.html>. Jan. 30, 2014. Web.

Hall, Catherine. “Macaulay’s Nation.” *Victorian Studies*. 51.3 (Spring 2009): 505–23. Print.

Hardy, Florence Emily. *The Life of Thomas Hardy, 1840–1928*. 1962. London: Macmillan, 1975. Print.

Hardy, Thomas. *The Complete Poems of Thomas Hardy*. Ed. James Gibson. New York: Macmillan, 1976. Print.

---. “Destiny and a Blue Cloak.” *“The Withered Arm” and Other Stories*. Ed. and introd. Kristin Brady London: Penguin, 1999. 3–26. Print.

---. *Hand of Ethelberta: A Comedy in Chapters*. 1878. Ed. and introd. Tim Dolin. London: Penguin, 1997. Print.

---. *Jude the Obscure*. 1895. Ed. and introd. Patricia Ingham. Oxford: Oxford UP, 1985. Print.

---. *The Life and Work of Thomas Hardy*. Ed. Michael Millgate. London: Macmillan, 1984. Print.

---. *The Return of the Native*. 1876. Ed. and introd. Simon Gatrell. Oxford: Oxford UP, 1990. Print.

---. *Thomas Hardy’s Public Voice: The Essays, Speeches, and Miscellaneous Prose*. Ed. Michael Millgate. Oxford: Clarendon P, 2001. Print.

---. “The Waiting Supper.” *“The Withered Arm” and Other Stories*. 280–328. Print.

Herbert, Christopher. *War of No Pity: the Indian Mutiny and Victorian Trauma*. Princeton: Princeton UP, 2008. Print.

- Houghton, Walter. *The Victorian Frame of Mind, 1830-1870*. New Haven: Yale UP, 1964. Print.
- Kanner, Barbara S. "The Women of England in a Century of Social Change, 1815-1914." *Suffer and Still: Women in the Victorian Age*. Ed. Martha Vicinus. Bloomington: Indiana UP, 1973. 173-206. Print.
- "Life expectancy." <http://www.census-helper.co.uk/victorian-life/>. Feb. 3, 2014. Web.
- "Macaulay's Minute on Indian Education." History of English Studies. <http://oldsite.english.ucsb.edu/faculty/rraley/research/english/macaulay.html>. Feb. 7, 2013
- Morris, R.J. "Victorian Values in Scotland and England." *Victorian Values*. Ed. T.C. Smout. Oxford: Oxford UP, 1992. 31-47. Print.
- Plotz, John. "Motion Sickness: Spectacle and Circulation in Thomas Hardy's 'On Western Circuit'." *Studies in Short Fiction* 33. 3 (Summer 1996): 396-86. Print.
- Reed, John. *Victorian Conventions*. Athens: Ohio UP, 1975. Print.
- "The Revolt in the Indian Army." *Marx-Engels Archive*. <http://marxists.org/archive/marx/works/1857/07/15.htm>. Feb. 5, 2013.
- Sharpe, Jenny. "The Unspeakable Limits of Rape: Colonial Violence and Counter-Insurgency." Ed. Patrick Williams and Laura Chrisman. *Colonial Discourse and Postcolonial Theory: A Reader*. New York: Columbia UP, 1994. 221-43. Print.
- Sinnema, Peter W. "Introduction." *Self-Help: With Illustrations of Character Conduct, and Perseverance*. Ed. Peter W. Sinnema. 1851. Oxford: Oxford UP, 2002. Vii-xxviii. Print.
- Smiles, Samuel. *Self-Help: With Illustrations of Character Conduct, and Perseverance*. Ed. Peter W. Sinnema. 1851. Oxford: Oxford UP, 2002. Print.
- Thompson, F.M.L. *The Rise of Respectable Society: A Social History of Victorian Britain 1830-1900*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1988. Print.
- Tosh, John. *A Man's Place: Masculinity and the Middle-Class Home in Victorian England*. New Haven: Yale UP, 1999. Print.
- Turner, Paul. *The Life of Thomas Hardy: A Critical Biography*. Oxford: Blackwell, 1998. Print.
- Widdowson, Peter. *On Thomas Hardy: Late Essays and Earlier*. Houndmills: Macmillan, 1998. Print.